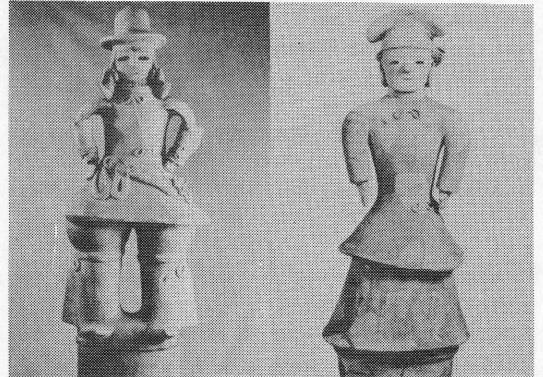


袴について

原 ますみ

1. はじめに

袴は現在、儀式、能、舞踊、冠婚葬祭など特別な場合に着用され、日常生活とは縁の薄いものとなった。その歴史は古く、「はかま」の「はか」には、腰より下に帯をはく、「ま」にはまとうの意味があり、元は、腰に巻きつけられた布（とくびこん襠鼻褌）であったものが、上衣の上につけ、腰から下を被うものになり、漢字も「袴」「褌」「婆加摩」「八加万」「穿裳」など、種々の字がある。古代から江戸時代まで男子に多く用いられ、上衣に比べて使用度数が多い現代のスラックス（パンツ）に相当する衣服である。袴は、前布と後布から成り、両脚を通すために左右別々に筒状に縫合され、上部に附けられた紐で腰に結びつけて着装する。布巾の少ないものはズボンの形に、褶付き、襷付きなど、布巾の広いものは、スカート状に見える。最近、女子学生の袴姿が卒業式に多く見られるようになったのは、生活が豊かになり、懐古趣味を楽しむ余裕が出て来た為であろう。



(図1) 衣褌

(図2) 衣裳



(図3) 高松塚壁画

2. 袴の由来

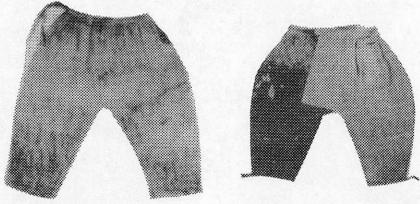
袴の由来は、明確にされていないが、「古事記」「日本書記」に見られる上古の「褌」^{はかま}は、我国では古墳時代より用いられており、各地で発掘された六、七世紀の埴輪の衣褌^{きぬばかま}（図1）、衣裳^{きぬも}（図2）の容姿は、中国の魏、晋、南北朝時代の北方諸族の服装で、防寒と乗馬に適するように作られた胡服系統の衣服である。

これは、高松塚古墳壁画（図3）と高句麗壁画（図4）に見られる袴が類似し、正倉院所蔵の袴と今日の韓国の袴（図5）が、似ているこ



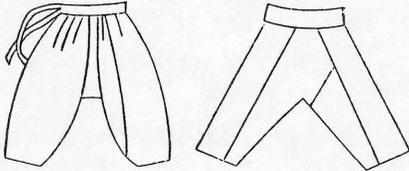
(図4) 高句麗壁画

(図5) (正倉院宝物)



正倉院の閉股袴

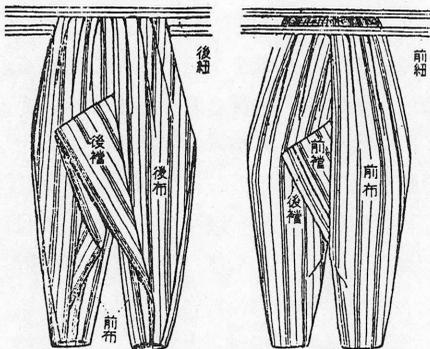
正倉院の開股袴



今日の韓国女子袴

今日の韓国男子袴

とからも推察できる。又、仕事着及び、庶民の袴である山袴は、農村の立付、台湾高地族のポヨヨ・カチンなど、インドネシア諸族の袴と類似している。このように袴は、大陸の民族服と深く関わり合っていることが判る。地方によって呼び名や型が少しずつ異なる山袴は、現在もんべと言ひ、古くから山村地帯の農民の仕事着（日常着）として、男女にかかわらず着用されていた。その形態は、前後に四枚の布を用いて股上を縫い、必ず股下に三角形や四角形の襠をつけた。(図6) 最近は、洋式のズボンの構造を取り入れ、紐結びからゴム入りに変わった。第二次大戦中は、女子の防空服にも用いられた。



(図6) モンペ

3. 袴の変遷

袴が日本文化の発展と共に、形状、材質等を変えていく様を、時代を追って述べる。

原始から古墳時代の袴は、男子のみに用いられ、丈が足首までの太いズボンのような形式で、外出する時には膝下を脚結あひいと言う紐で結んで活動の便をはかっており、女子はスカート状の衣裳を着用していた。材質は、植物の蔓や根、葉の繊維から糸を紡いで織った布である。

飛鳥、奈良時代は、中国大陸文化の流入により、風俗が唐風に変化したため、袴も細くなり、上衣が長くなって、裾口しか見えなくなった。

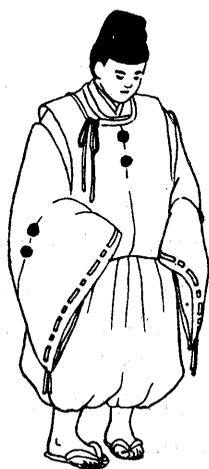
(図7) 袴は、礼服らいふく、朝服、制服に用いられ、細目の白袴でズボン式くくりおぼかまのものと、括緒袴くわくじといつて裾口に紐を通して締めるモンベ式もんべのものがあつた。この二様式は、袴の基本型として後世には、表袴うゑのはかま、指貫さしぬきに発展した。貴族の女性は、これを下着として用いた。

(図7) 奈良朝朝服

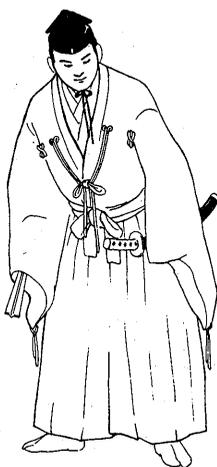


(図8) 無位官人の束帯

平安時代に入ると、貴族男子は礼装の時、下袴である紅色系統の大口袴の上に、白の表袴をつけ、これにつぐ礼服である衣冠、直衣には、裾の長い下袴の上に、八幅にして前後の襷を等しくした裾口に括緒がある指貫を着た。(図8) これに対し一般男子は、筒形の細く短い

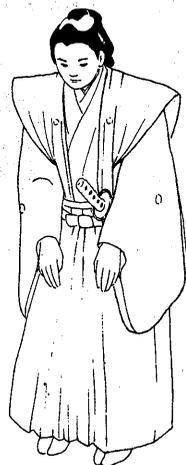


(図9) 水干



(図10) 直垂

括袴の水干小袴を用いた。(図9) この時代は、華麗な公家文化であったため、身分によって、形の大小、文様や材質も使い分けられた。色合いは紫、青が最も普通であったが、金襴緞子の豪華なものも作られた。女性も宮廷の裳形式が変化して、下袴が表袴に変わり、十二単の装いとして、緋の袴を右脇で紐で結んで穿いた。



(図13) 肩衣半袴

う。下級武士の間では、膝より上の丈の短かい^{よのばかま}四幅袴(図11)が用いられ、女房装束も単純化して、普段は小袖姿となり、袴は、儀礼的な着装品となった。材質は、源平、錦、蜀紅、唐綾、緞子、^{ちようけん}長絹、^{すずし}生絹で、地色は、青、紫、赤、紺、木蘭、朽葉などである。

貴族的武家文化になった室町時代は、直垂、大紋、素襖(図12)が武士の礼服となり、足を隠す風習が生まれ、脇に襷の入った長袴が用いられたが、これは、武士の乱行を防ぐためでもあった。

安土桃山時代の男子は肩衣半袴(図13)、女子は小袖に細い帯を締めるだけとなった。このように、衣服が簡易化された反面、礼服には^{ながかみしも}長袴の重々しい衣服が用いられた。立付は、武者修業や戦、狩猟などの着衣として、膝下が急に細くなったボタン掛けのものである。木綿栽培が始まり、材質も麻から木綿へと変った。

江戸時代になってからは、袴の形が変化して、背の腰板の下に薄板の鞍越(蟬形)をつけ、これを共裂で包み、紐も細くなり、腰幅に対して裾幅が広がって、全体の形が三角形に近くなった。中央の襷も均等に寄せた^{すぐひだ}「直襷」から、放射状に寄せた^{よせひだ}「寄襷」となり、夏は単袴、冬は袷袴となった。代表的な男装は、長袴、半袴、継袴(図14)で、半袴の一般化により、肩衣と



(図11) 十徳四幅袴



(図12) 素襖

鎌倉時代は、質実剛健の武家社会となり、服装も一変して、力強さを表現する^{こわそうそく}強装束が流行し、^{ひたたれ}直垂(図10)が用いられた。袴と同じ材質で仕立てることから、この組合せを上下と言い、直垂に大きな定紋をつけた礼服を大紋直垂と言



(図14) 長袴と継袴

袴が分離し、袴や肩衣と関係なく袴の材質を選ぶようになった。日常は、裾の低い縞模様の袴が用いられ、旅行用には、裾高の野袴が着用された。平袴がすたれると、ピロードの縁を付けた裾高の馬乗袴が流行した。袴地は、金欄、草木綿、麻、緞子、紋織などで、地色は、茶、納戸、花色など、さまざまであった。この頃には、女子の袴姿は殆ど見られなくなった

明治時代に入って、式服として羽織と共に裾高袴が着用されたが、欧米文化の影響により、礼服もだんだん洋服化していった。明治8年、東京女子師範学校の制服として、男袴が採用され、後に裾のない女袴に変わった。質素な袴姿は、女学生の制服として、全国に普及し、紫色とえび茶が主で、裾や腰には線を入れた。(図15)これが、後のセーラー風の制服のはしりとなる。

又、宮中の婦人の制服にも採用されたため、現在も儀式的の礼服として用いられている。行灯袴は、児童、生徒の通学着や、書生などの平常着としても着用された。

現在の男子の袴地には、絹100%の仙台平、五泉平、山辺里平、^{さへり}嘉平次平^{かへいじ}(仙台、五泉、米沢、八王子、京都を主産地とする)が用いられている。礼装用には、紋付羽織との組合せで、馬乗袴もあるが、殆んど、行灯袴が着用されて



(図15-1) 波型白線の袴章——明治三十年頃——



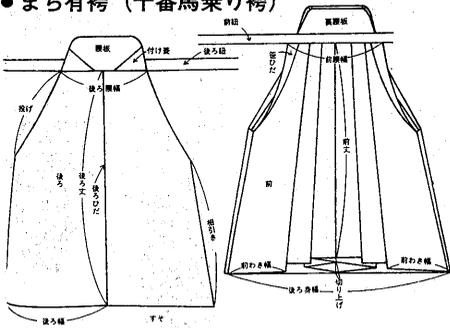
(図15-2) 黒線二本の袴章——明治三十八年頃——

いる。襷は、前が右2本、左3本を中央へ折り、後は1本の箱襷で、柄は、縞から小紋、亀甲など、金銀の入った派手なものもある。(図16)

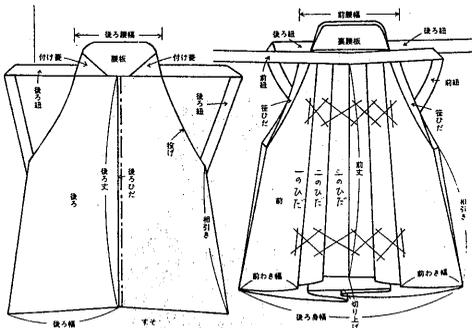
女子の袴地は、セル、サージ、カシミアなどのウール100%とポリエステル混紡で、色は、エンジ、茶、緑、紺、紫、赤などの行灯袴である。前襷は男袴と同じで、後襷は2本の寄襷である。又、男袴のように、切上げや腰板がなく、前紐よりも後紐を太めに仕立ててある。(図17)

(図16-1) 男袴

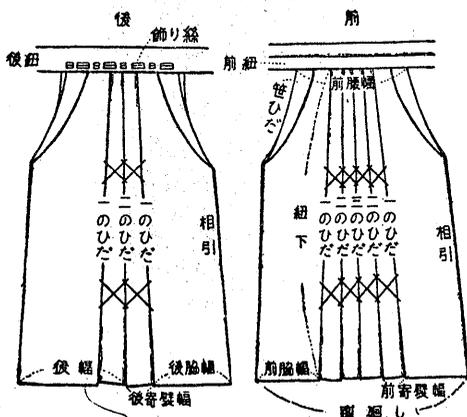
●まち有袴 (十番馬乗り袴)



(図16-2) ●男袴 (行灯袴)



(図17) 女袴



剣道着は、馬乗袴で、色は胴着と同じ、濃紺、黒、白で、生地は綿100%が多く、テトロン100%のものも使われている。後上部には、堅い芯の梯形腰板が付けられ、前中央に5本、後中央に1本の寄襲があり、裾幅は、腰幅より広くなって、動きやすく作られている。

特殊な袴としては、能楽や舞踊等の芸能人の用いる袴がある。

4. 終わりに

袴の由来は明確ではないが、その原形は大陸のズボンと同一であることが想像できる。二股に分かれて、脚全体を包む共通の原形は、どのような必要性から生まれたのかを判断することが、発生のルーツを探るのに最も重要である。具体的には、防寒又は防虫の何れか、又は両方の為かと言う風土に適した必要性である。大きな表現ではあるが、人類の発生と同様、袴のルーツも広大な大陸である可能性が強く、その中でも温暖な南方ではなかろうかと考えられる。発展の過程において、装飾的に又は実用的に形や材質が、着用者の住む地域の風土、文化等の生活環境上の必要性と用途に応じて変ることは、当然であり、これと組合わせて着る上着、下着などの形や材質と関わり合うことも事実である。行灯袴とスカートは、それぞれに組合わせて着る上衣、下着等との関連で、用途(機能性、装飾性を満す)に応じて、別々に原形から変化したものと思われる。したがって、袴の将来の消長は、組合わせて着る衣服、全体的には、和服(着物)が、装飾性の強い儀式用の礼装や懐古的(リバイバル)な晴着としてではなく、実用的な平常着として、現在どれ程、用いられているかによって、うかがい知ることが出来るような気がする。

最後にこの稿をまとめるにあたり、本学教授奥平志づ江先生に御指導いただきましたことを深く感謝いたします。

(参考文献)

服装大百科事典
日本風俗史事典
服飾変遷の原則
日本服飾史
江戸服飾史

文化出版局
日本風俗史学会
小川 安朗
北村 哲郎
金沢 康隆

服装文化史

日本服飾辞典

かぶりもの、きもの、はきもの、

韓国服飾文化史

鷹司 綸子

河鱗 実英

宮本馨太郎

柳喜卿・朴京子

「比較」古代日本と韓国文化（下） 千寛宇・金東旭
衣生活（1978. No. 5）

（明治時代における女学生の服装の変遷）

男のきもの事典

下中 典士